

冬の星空を見上げて

校長 久保田範夫

本年度の冬季休業前集会（平成二十七年十二月十六日）の中で、私は次のような趣旨の話をした。生徒諸君にとっては二度目になるが、敢えてここに掲載したい。

二百二十九期生のセンター試験迄の頑張り、その後の二次試験直前迄の最後の粘り・伸びに期待したい。（安高生の試験直前までの伸びは凄いの一言だし、更に言うならば、試験を受けながらどんどん力を付けることを忘れないで。）

一・二年生は、秋から三月にかけて、英単語・古文単語の語彙増強、古典的な良い文章に可能な限り触れること、徹底した地道なドリルによる数学の苦手分野の克服など、この時期にどれだけ問題演習をしてどれだけ力を蓄えるかが、センター試験、二次試験の成否の鍵となるし、ひいては、これからの人生の中で大切になる「学び続ける力」の土台を築くことにもなる。勉強だけで無く、部活動も同じだということは言うまでもない。今、着実に力を付けつつある君たちに世阿弥の「花伝書」の言葉を紹介する。

：一期のさかひこいちこなりと、生涯にかけて、能を捨てぬよりほかは、稽古あるべからず。ここにて捨つれば、そのまま能はとまるべし。：（「風姿花伝」第一、年来稽古条々、十七八より）

生徒諸君にとつての「能」とは、高い志であり、教師、法律家、建築家や医師等々になろうとする夢や志と言っても良い。それを捨てない決心を固めて持ち続けること以外に、「稽古」即ち勉強に励む方法は無い。

とは言え、地道な努力はつらいもの。家で勉強していて眠くなった時の対処法として、お茶や珈琲を飲んだり、好きな音楽を聴く、思い切って寝てしまい翌朝早起きする（私の経験では、大抵は早起きできない）など様々だろう。私の高校時代の経験上最も効果的だったリフレッシュ法を紹介すると、星空を見上げるといふ簡単なこと。

今の時期、夜空を見上げると三つの楽しみがある。

一つ目は、三大流星群の一つ「ふたご座流星群」。ただ、残念なことに十五日未明がピークだった。

二つ目は、夜明け約一時間前の「明けの明星」。金星は最大でマイナス四・七等級。シリウス等明るい星が一等級だが、その百倍の明るさ。六時を過ぎてもかなり明るい、五時半から六時にかけて、南東の空にひときわ明るく輝く明星を是非見てほしい。(因みに、平成二十八年六月七日以降は、「宵の明星」となって「一番星みーつけた♪」となる。)そして三つ目は、何と言っても夜八時過ぎ東天に輝く冬の星座「オリオン座」。オリオン座は他の星を見つucker目印にもなる。シリウスはベルトのラインを南東へ拡張することによって見つかる。全天に二十一個ある一等星の一つベテルギウスとおおいぬ座の α 星シリウス、こいぬ座の α 星プロキオンの三つの一等星で、冬の大三角を形成することを知っている人も多いであろう。

風邪を引かない程度に真冬の星空を眺めて、宇宙の成り立ち、宇宙の中の地球と人間の存在の意味、などなどに思いを馳せるもよし。冬の星空を見上げてリフレッシュしよう。今年は、九月頃からインフルエンザ流行のニュースが気になったが、その後は暖冬傾向もあり落ち着いている(会津では小流行状態)。しかし、危険なノロウイルスを含めて十分に用心をしてほしい。そして、様々な力をしっかりと蓄える冬にしてほしい。)

ここからは、時間が無いため省いてしまった部分になる。

)(風邪を引かない程度に真冬の星空を眺めて……宇宙と人間に思いを馳せるもよし。)また、吉田一穂^{いっすい}の詩「少年」の一節、「参星^{オリオン}が来た！」を思い浮かべて、寒い冬に、弱い自分に立ち向かう元気をもらうのもよし。

少年

吉田一穂

蟲の約束に林を渡る啄木鳥よ。

(鴨は谿の月明りに水浴^{みあみ}してゐる)

参星^{オリオン}が来た！ この麗はしい夜天の祝祭^{まつり}。

裏の流れは凍り、音も絶え、

遠く雪嵐が吼えてゐる……

落葉松^{かまつばやし}林の罅に、何か獲物が陥ちたであらう。

弟よ、晨^{あした}、雪の上に新しい獣の足跡を探しに行かう。

『吉田一穂詩集』（岩波文庫）より

吉田一穂は北海道生まれ。不世出の「極北詩人」と称される。「少年」と題されたこの詩は、文字通り一穂の少年期の追憶である。それは、林、美しい冬の星座、遠くに吠えている雪嵐である。年若い少年にとって未知の象徴と言える「新しい獣」に胸をはずませる少年期の思い出・原風景が、この詩には詰まっている。

また、風が冷たく感じられたある夜、何気なく見上げた空にオリオン座を見つけて、「ああ、冬が来たんだな」と感じる人も多いと思うが、福島県人なら誰もが知っている（はずの）『智恵子抄』の作者で、本県と縁のある高村光太郎の「冬が来た」という詩を生徒諸君は知っているだろうか。私は、中学時代に初めてこの詩に触れた。当時としては結構強い衝撃を受けて、以来繰り返し読み返した記憶がある。

冬が来た

きつぱりと冬が来た

八つ手の白い花も消え

公孫樹^{いそで}の木も簾^{はうき}になつた

きりきりともみ込むような冬が来た

人にいやがられる冬

草木に背かれ、虫類に逃げられる冬が来た

冬よ

僕に来い、僕に来い

僕は冬の力、冬は僕の餌食だ

しみ透れ、つきぬけ

火事を出せ、雪で埋めろ

刃物のやうな冬が来た

『高村光太郎詩集』（岩波文庫）

大正三年二月九日に作られ、『美の廃墟』三月号に発表、当初は百二行にも及ぶ長詩であったが、後に九行の詩となり、それを収録した光太郎の第一詩集『道程』が刊行されたのは同年十月、長沼智恵子と結婚したのは十二月である。（「道程」の冒頭の一節「僕の前に道はない 僕の後ろに道は出来る」はあまりにも有名。）光太郎の「冬」は単に季節のことではなく、来るべき時期に向けて力を蓄える雌伏の時、或いは、人生における困難な時期ととらえ、厳寒に耐えた者のみが春の温かさを知るのだ、という読み方もあるでしょう。人によつては、冬の早朝のラジオ体操、ジョギングや白い息を吐きながらセンター試験会場に向かう受験生の列などの場面を思い浮かべることもあるだろう。ただ、この詩からはもっとストレートに、「冬」という厳しい季節の到来に立ち向かっていく元気をもらえば良いのかな、との思いもある。（なお、三好真亜沙作曲の「女声合唱とピアノのための『冬が来た』」があることを付け加えておく。）